

保育者を目指す学生の読書経験と子どもの頃の 読み聞かせに関する研究 —— 3年間の質問紙調査による検討 ——

A study on Reading experience and Reading picture books
in Childhood for Students aiming to be Childcare teachers:
Analysis and Consideration based on Questionnaire Survey
for Three years

渡邊 舞・井口 美和・横田 由紀子
Mai Watanabe, Miwa Iguchi, Yukiko Yokota

問 題

絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手による無意識的コミュニケーションを通して「ことば」と「絵」を媒体とした知識・情報等を獲得するとともに、想像力、社会性や道徳性等を涵養し、日々の生活や心の豊かさにつながるものである。集団の場において友達と共に経験する「読み聞かせ」は、共通の体験をとおして共感しあったり、想いを伝え合ったりすることにもつながり、さらに共通の体験から遊びを生み出したり、遊びの工夫発展につながっていく。したがって絵本の読み聞かせは保育教育現場において日常生活の一部となっている。しかし、保育教育現場においては日常化故に、ともすると時間の利用といった目的が先行しがちなものも否めないことが実際の姿である。また、絵本の読み聞かせは、子育て中の家庭でも多くなされている活動でもある。家庭における読み聞かせにおいては、集団の場よりもさらに、読み手と聞き手の関係性を深める事につながっていく。

子どもにとってのこのような貴重な経験の担い手は養育者や保育者である（田島・宮下・大熊・岩崎・松本・伊東, 2014）が、現代青年は読書離れの傾向があり、小学生よりも中高生では読書活動や図書館利用が低減していくことが指摘されている¹⁾。浅木（2015）はロングセラー絵本について保育者をめざす学生と現場の保育者の読書傾向が低迷していることを報告している²⁾。また古川（2021）は大学生の絵本経験について、絵本の魅力を感じているものの、読んだ絵本のジャンルには偏りがあることを明らかにしている³⁾。このような読書離れの傾向を受け、平成18年版文部科学白書では「学校における読書活動の推進」が明記され⁴⁾、各自治体では、子どもの読書を促進する事

業を進めている。例えば、北海道教育委員会では子どもの読書活動推進プログラムに取り組んでいる⁵⁾。文部科学省の「全国学力・学習状況調査」によると平成19年には、北海道内の小学校の朝読書実施状況は66.4%、中学校では53.2%であり、全国平均（小学校92.0%・中学校84.6%）を大きく下回っていたが、平成22年の調査では小学校では95.3%（全国平均；98.0%）、中学校では78.0%（全国平均；91.9%）と上昇しており、各学校で朝読書の習慣が浸透しつつあることがうかがえる⁵⁾。読書の経験や子どもの頃の読み聞かせの経験は、保育者として現場で読み聞かせを取り入れる際の選書の視点や読み聞かせのスキルに寄与するものと考えられる。

渡邊・井口・横田（2021）は保育者を目指す学生の多くが保育所・幼稚園実習で読み聞かせを経験していることを報告している⁶⁾。また保育者を目指す学生は、実習前になると「絵本を選ぶことができない」という不安を抱いている。この不安は、学生自身が絵本を知らないことを認識している事実を示しているといえよう。保育教育現場での読み聞かせでは、状況や場面に応じた目的やねらいが重要である。例えば、「たくさん絵本に触れてもらう」「生活場面につなげる」といった目的を持つことによって選書の意識も異なるであろう。保育者を目指す学生が経験する各実習では読み聞かせを生活場面や保育の導入等に活用する場面が多く、幅広い絵本に関する経験や知識が必要となる。絵本は数多く出版されているにもかかわらず最適の絵本を選べないという、学生のニーズに対する保育者養成校の役割は大きい。

保育所保育指針⁷⁾や幼稚園教育要領⁸⁾等では、絵本活用の意義は「言葉の領域」において、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養うものであり、また絵本や紙芝居を楽しむことによって子どものイメージの世界を広げることに貢献すると記載されている。一方、保育教育現場における絵本の読み聞かせは、「言葉の領域」で記載されているような目的に特化しているわけではなく、多様な目的から日常生活の中で活用されている。したがって保育者養成校では、絵本について各専門領域の視点から複数の講義で教授されている。例えば本研究の協力校における「児童文学」の講義では15回の講義中7回を絵本の内容にあてている。指定テキスト（北海道えほん研究会, 2019）を使用し⁹⁾、直接絵本に触れる機会を重要視している（横田・渡邊・井口, 2021）¹⁰⁾。また絵本作家（あべ弘士氏）による特別講義を取り入れるなど絵本に対する興味・関心を高める工夫を実践している。作家がどのような思いで制作しているかなどを知り、さらに、様々な種類の絵本の存在を認識することは、学生の絵本を選択する眼を育てる。単に、「絵が好き」「お話が面白い」だけではない選択理由を考えられることの意味は大きい¹⁰⁾。

本研究の目的は、保育者を目指す学生の読書経験や読み聞かせの経験を明らかにすることである。また、学生の読書と読み聞かせの経験の傾向を踏まえ、保育者養成校の役割として、実習前の指導や講義内容に活かしていく視点を提言する。

方 法

調査協力者と調査日時

調査協力者は北海道内の短大生であった。2018年7月（84名）、2019年10月（97名）、2020年10月（95名）計276名に対し、質問紙調査を行った。

質問紙の内容

①読書と絵本の好意度：「とても嫌い～とても好き（5件法）」の項目を選択。その理由を自由記述で回答してもらった。②読書経験：頻度と場所についての項目を選択。③読み聞かせ経験：頻度と読み手についての項目を選択。④自分が好きな絵本のタイトル；子どものころ好きだった絵本のタイトルを自由記述で回答してもらった。⑤実習に関する項目：実習時の選書で重視する点についての項目（こどもの発達に応じた・絵に魅力がある・言葉が楽しい・ストーリーが楽しい・その他）を選択。⑥実習での読み聞かせに対する楽しみと不安；「全くそう思わない～とてもそう思う（5件法）」の項目を選択。⑦読み聞かせのボランティア経験の有無を選択。

倫理的配慮

調査協力者には、研究目的を説明し、回答内容は統計的に分析するため個人が特定されることはないこと、協力は任意であることを教示し、同意が得られた学生に協力してもらった。

結 果

本研究は2018年～2020年にデータを収集したものであるが、3年間の調査実施年度によって各指標の分布に偏りがなかったことを確認した。したがって、以下の分析では3年間のデータ総数を使用していく。

保育者を目指す学生の読書傾向

協力者には、「読書に対する好意度」および「過去と現在の読書頻度・読書場所」を回答してもらった。読書について、「好き（78名）」、「やや好き（102名）」と回答した協力者が約65%であり、半数以上の協力者が読書に対して好意的にとらえていた。一方で「やや嫌い（29名）」、「嫌い（14名）」と回答した学生は約16%であり、「文章を読むことが苦手」「理解できないことがある」「読んでいると飽きる」「読む機会がない」といった理由が挙げられていた。読書の頻度については小・中学校時代には週1回以上の読書頻度の協力者が80%程度を占めているが、高校時代にはその頻度が低くなり（週1回以上の頻度：約68%）、短大生となった現在では、協力者の約59%が月に1回未満の頻度しか読書をしていなかった（表1参照）。読書の場所については小・中学校時代には学校の教室（小学校：約62%・中学校：約74%）が読書の場として最も多く選択されていたが、高校時代・現在では自宅（高校：約38%・現在：約79%）が読書の場として最も多く選択されていた（表2参照）。

表1 過去と現在の読書の頻度 (人数)

	毎日	週1回以上	月に数日	月に1日	月に1日未満
小学校	143	86	31	11	5
中学校	143	75	32	9	17
高校	121	68	44	16	27
現在	13	16	47	37	162

表2 過去と現在の読書の場所 (人数; 複数回答)

	自宅	学校の図書館	公共の図書館	学校の教室	交通機関	その他
小学校	73	61	11	172	0	3
中学校	67	16	4	203	0	4
高校	106	17	7	93	5	7
現在	219	9	8	7	25	5

保育者をめざす学生の読み聞かせの経験

協力者には、「絵本に対する好意度」および「子どもの頃の読み聞かせの経験頻度」「読み聞かせをしてくれた人 (複数回答)」を回答してもらった。絵本について、「好き (208名)」、「やや好き (54名)」と回答した協力者が約95%であり、多くの協力者が絵本に対して好意的にとらえていた。その理由として「内容だけでなく絵も楽しめるから」「絵がかわいい」「文字が少なくてよい」といった、言葉よりも絵の魅力についての言及が多かった。子どもの頃の読み聞かせについては、その記憶がないと回答した協力者が16名いたが、「よくあった (188名)」「たまにあった (58名)」と回答した協力者が約89%であり、多くの協力者が子どもの頃読み聞かせをしてもらった経験があると回答していた。読み聞かせをしてくれた人については母親 (141名) と保育所・幼稚園の先生 (139名) が多く、以下父親 (22名)・祖母 (17名)・その他家族 (11名) が選択されていた。

子どものころ好きだった絵本に関する分析

協力者には、好きな絵本のタイトルを記入してもらった。記入された絵本は882冊であり、一人当たりの平均は3.2冊であった。以下はタイトルが不明なものや紙芝居・児童書を除き768冊を分析対象とした。768冊の絵本について上位リストを表3に示す。同タイトル・同シリーズの絵本をまとめ集計したところ総タイトル数は252タイトルであった。協力者に最も選択された絵本は『ぐりとぐら』(54名)であった。以下『バムケロシリーズ』(52名)『はらぺこあおむし』(34名)『くろくんシリーズ』(32名)『そらまめくんシリーズ』(28名)であったが、上位5位でタイトル数全体の約79% (総冊数の約26%) を占めていた。本研究の調査協力校では、「児童文学」の講義内で指定テキスト (北海道えほん研究会, 2019) を使用しているが⁹⁾、協力者が記述した252タイトルのうち指定テキストに記載されているものは90タイトルであった。

次に初版発行年別の検討を行った。「1979年以前（45タイトル）」、「1980～1999年（87タイトル）」、「2000年以降（120タイトル）」の3つの区分を設定した（表4参照）。シリーズ物については最も古い絵本の発行年を採用した。「2000年以降」の比較的新しい絵本がタイトル全体の約48%を占めていた。また浅木（2015）が抽出した1950年代から1970年代に出版されたロングセラー絵本51冊のリストを使用し、本研究で学生が記述した絵本の中にこれらがどの程度含まれているかを検討した²⁾。51冊のロングセラー絵本の中で本研究では15冊が該当した^{注2)}。

「児童文学」の講義内で使用している指定テキスト（北海道えほん研究会, 2019）⁹⁾ および絵本ナビの検索^{注1)}を使用し、ジャンルの分類を試みた。252タイトルのうち日本の絵本が180冊であった。指定テキスト（北海道えほん研究会, 2019）⁹⁾の分類にならい、0～2歳を対象とする赤ちゃん絵本（12冊；例『はらぺこあおむし』『いないいないばあ』）、科学絵本（6冊；例『みんなうんち』）、障がいの有無にかかわらず楽しめるバリアフリー絵本（2冊；例『だめよ、デイビッド』）、仕掛け絵本（2冊；例『ペネロペシリーズ』）、民話（2冊；例『三びきのやぎのがらがらどん』）に分類した。その他の絵本の多くが物語絵本（222冊）であった。

表3 絵本タイトルの上位リスト（人数）

タイトル	n	タイトル	n
ぐりとぐら	54	こんとあき	14
バムケロシリーズ（バムケロのにちようび他）	52	おばけのてんぷら	13
はらぺこあおむし	34	だるまんシリーズ（だるまんが他）	13
くろくんシリーズ（くれよんのくろくん他）	32	からすのパンやさん	12
そらめくんシリーズ（そらめくんのベッド他）	28	おまいうまそうだな	9
ノタンシリーズ（ノタンおやすみなさい他）	21	ぐるんぱのようちえん	8
はじめてのおつかい	21	三びきのやぎのがらがらどん	8
しろくまちゃんシリーズ（しろくまちゃんばんかいに他）	18	めっきらもっきらどおんどん	8
おいしいのぼうけん	15	どうぞのいす	7
ねずみくんシリーズ（ねずみくとホットケーキ他）	15	へんしんシリーズ（へんしんトンネル他）	7

表4 発行年別の上位タイトル

1979年以前	1980～1999年	2000年以降
ぐりとぐら	バムケロシリーズ	くれよんのくろくんシリーズ
はらぺこあおむし	そらめくんシリーズ	だるまんシリーズ
はじめてのおつかい	こんとあき	おまいうまそうだな
ノタンシリーズ	めっきらもっきらどおんどん	へんしんシリーズ
しろくまちゃんシリーズ	どうぞのいす	つみきのいえ
ねずみくんシリーズ	よるくま	なつみはなんにでもなれる

実習での読み聞かせに関する意識

本研究は初めて実習に臨む前の調査であった。はじめての実習で経験する読み聞かせについて、どのような配慮をしたいか項目を選択してもらったところ、「ストーリーが楽しいもの (104名)」が最も多く、続いて「発達に応じた配慮 (98名)」を選書で意識すると回答していた。「絵に魅力があること (44名)」や「言葉が楽しいこと (31名)」は選書への配慮として少なかった。また実習前に読み聞かせのボランティア経験があると回答した学生は98名であった。

実習で経験する読み聞かせを楽しみにしている程度 (以下、楽しみ得点とする) の平均値3.46点 (SD = 1.30) であり、不安を感じている程度 (以下、不安得点とする) の平均値は3.61点 (SD = 1.27) であった。楽しみと不安の関連について Pearson の相関係数^{注3)} を算出したところ有意な正の相関がみられた ($r = .14, p < .05$)。楽しみが高まると不安も高まることを示すが、その関連の強さは非常に弱いものであった。次に、協力者の読書経験が実習での読み聞かせでの楽しみや不安に及ぼす影響を検討した。読書の好意度 (高群 (とても好き・やや好き)・低群 (どちらでもない・やや嫌い・嫌い))・現在の読書頻度 (高群 (月1回以上)・低群 (月に1回未満))・好きな絵本の冊数 (2冊以下・3冊以上)・ボランティア経験について、それぞれ2群を作成した。協力者の読書経験によって、楽しみ得点と不安得点に差がみられるかを検討するために対応なしのt検定^{注4)}を行った。その結果、楽しみ得点では読書好意度による有意傾向の差が見られ ($t(274) = 1.78, p < .10$)、読書への好意度の高い群の方が低い群よりも楽しみ得点が高い傾向がみられた。また読書頻度による有意な差が見られ ($t(273) = 2.12, p < .05$)、読書頻度高群の方が低群よりも楽しみ得点が高かった。不安得点ではいずれの経験においても有意な差が見られなかった (表5 参照)。

表5 保育者を目指す学生の読書経験による読み聞かせへの楽しみと不安 (点)

		n	楽しみ	t 値	不安	t 値
読書好意度	好意度高	180	3.56	1.78 ⁺	3.63	.32
	好意度低	101	3.27		3.57	
現在の読書頻度	頻度高群	113	3.65	2.12 [*]	3.61	.11
	頻度低群	162	3.32		3.60	
絵本冊数	2冊以下	144	3.35	1.42	3.53	1.01
	3冊以上	129	3.58		3.69	
ボランティア経験	経験あり	98	3.50	.19	3.49	.93
	経験なし	188	3.47		3.64	

* $p < .05$, ⁺ $p < .10$

考 察

保育者を目指す学生の6割以上が読書について好意的にとらえていたが、現在の読書頻度は非常に低く、田島ら（2014）¹⁾の結果を支持するものであった。保育者を目指す短大生は、2年間で多くの必修科目を修得することに加え、複数回（調査協力校では4回）の実習が必須である。またアルバイトをしている学生も多く、読書のための時間を確保することが難しいことが要因の一つと考えられる。読書頻度や読書への好意度が高い学生は実習での読み聞かせに対する楽しみ得点が高かったことから、読書習慣を持つことの意義があるといえる。小学校と中学校時代には週1日以上の読書頻度が80%程度を占め、毎日の読書頻度も50%であった。学校の教室が読書の場所として多いことから、読書活動推進プログラムの効果のあらわれであろう。学童期に獲得した読書習慣を青年期まで継続していくことが今後の課題となる。

保育者を目指す学生の9割以上が絵本に対して好意的にとらえていた。また学生の約9割が読み聞かせを経験したと回答しており、古川（2021）³⁾の結果を支持し、子どもにとっての絵本の読み聞かせは生活の一部であることを示した。一方で学生が記述した好きな絵本には偏りがあった。協力校のテキスト（北海道えほん研究会, 2019）⁹⁾や浅木（2015）²⁾が抽出したロングセラー絵本のタイトルは3割前後しか記述されておらず、2000年以降絵本が半数程度を占めていた。学生の多くは2000年前後の生年月日であるため、誕生後の新しいタイトルが好きな絵本として多く選択されていたことを示す結果である。ロングセラー絵本は50年以上多くの家庭や保育教育現場に存在し、誰もが認知している何回読んでも飽きない内容であるが、一方で絵の特徴として突飛さがあまりなく落ち着いた色合いの表紙も多い。例えば研究者の間では評価の高い赤羽末吉氏の絵について、学生は講義内や講義後の感想として「随分と古い絵」と印象を述べることもある。また可愛い絵柄が子どもにふさわしいとの認識を持っており、絵本の絵に関する近年の学生の見方には特徴がある。比較的新しい絵本（例えばヨシタケシンスケやtupera tuperaの絵本）は斬新なデザインや色遣いの鮮やかさ等の特徴があり、これまでの国内で発行されてきた絵本とは随分と印象が違うものが多く出版されるようになった。このような新しい絵本の印象が近年の学生の鮮明な記憶となり、本研究で好きな絵本として多く記述されていた可能性がある。また7割以上が日本の作品であり物語絵本が約9割を占めていた。保育者を目指す学生は実習の様々な場面や目的によって絵本の読み聞かせを経験する可能性があることから、ロングセラー絵本や目的に合わせた幅広いジャンル等、多くの絵本を知ることが重要となる。

本研究で明らかとなった学生の読書経験と実習での読み聞かせに関する意識との関連を検討した。様々な読書経験は実習への不安度と関連しなかったことから読み聞かせの不安については読書経験に依存しないことが示された。学生の子どもの頃の経験から読み聞かせの読み手は養育者だけでなく保育教育現場の先生もその役割を担っていることが明らかになり、実習に臨む学生全般が抱く読み聞かせへの不安を解消していくために保育者養成校のサポートが望まれる。学生が実習に際して「読み聞かせ」を不安に思う原因として2点考えることができる。1つは「読み聞かせ」の技術であ

り、もう1つは「どの絵本を読んでいいのかわからない」ということである。前述したように、学校で読書をする時間が保障されていた時期を除くと、学生の読書時間は極端に少ない実態から、学生が絵本に触れる機会を殆ど持たずに、入学してくることが考えられる。読書経験の少なさというよりも、実習で必要な絵本についての知識が不足しているため、「何を読んでいいのかわからない」という不安が生まれると考える。「読み聞かせ」の技術は、練習することができるが、知識が簡単に増えることはない。そのため、養成校では、学生ができるだけ多くの絵本を読む機会を増やすことが重要である。どのような絵本を在学中に何冊読むのか等、絵本に関する年間計画をしっかりと立て、少ない授業時間で効果的な学びをできるよう考えていきたい。絵本は幼稚園教育要領では、領域「言葉」で扱われている。幼小連携からも、様々な「言葉」に触れ、「言葉をゆたかにする」一つの児童文化財として絵本は示されている。そのためには、物語絵本だけを読んでいては「言葉」との関連を考えると不足である。詩・ことわざ・オノマトペを中心とした絵本など、「言葉」を意識した絵本を、発達段階に合わせて用意して、学生にそのような絵本があることを知らせる必要がある。さらに、絵本は「言葉」の面からだけではなく、広い範囲の知識を学ぶことが可能な文化財であることも考えたい。絵本は子どもの感性を育て知識を増やし、子どもの興味・関心を育て、遊びを広げるものでもある。例えば、動物園に行く場合、その前後に動物園を題材とした絵本を読むことで、動物園への期待を高めその後、見てきた動物の確認をするなど多くのことを学び、動物園ごっこなどの遊びに発展する可能性もある。その他にも障がいや多様性を学んだり、科学的な目を開いたり、子どもを取りまく社会の様々な物や人、出来事について、絵本を読むことで楽しく知っていくことができるのである。以上のことから、養成校では年間計画を立てる際に、絵本の種類についても考える必要がある。物語絵本ばかり選択するのではなく、「言葉；例『えほんなぞなぞうた』」「科学；例『からだのなかでドゥンドゥンドゥン』」「障がい；例『さっちゃんのまほうのて』」「LGBTQ；例『タンタンタンゴはパパふたり』」など、現在出版されている多くの絵本を、学生が適切に選択できるように考慮したい。また、横田ら(2021)は絵本の「絵」についてもしっかり観ることを取り上げると、学生の意識が変わることを報告していることから¹⁰⁾、保育者養成校において「絵本」の学びに費やす時間はかせかせないとする。保育者養成校において「絵本」の学びに費やす時間は学生の保育者としての資質を伸ばすためにも必要な時間と考える。

今後の課題を述べる。本研究は一短大における調査に限られ、データには偏りがあった。今後多くの養成校で調査を実施することが望まれる。

注 釈

注1)「絵本ナビ (<https://www.ehonnabi.net/>)」を使用し内容を検討した。

注2) 浅木(2015)によるロングセラー絵本の中で、本研究で該当した15冊を示す。『からすのパンやさん』『きょうのなんのひ?』『ぐりとぐら』『ぐるんぱのようちえん』『三びきのやぎのがらがらどん』『ぞうのババール』『そらいろのたね』『だるまちゃんとてんぐちゃん』『てぶくろ』『どろんこハリー』『ねずみくんのチョコッキ』

『はじめてのおつかい』『はらぺこあおむし』『ラチとらいおん』『わたしのワンピース』

注3) Pearsonの相関係数とは2つの変数間の直線関係の程度を表すものであり、-1~1の間の数値で示す。1(-1)に近くなるほど変数間の関連が強いことを示す。

注4) 対応なしのt検定とは個人間(グループ間)での平均値の差を比較する検定のことである。

引用文献

- 1) 田島信元・宮下孝広・大熊美佳子・岩崎衣里子・松本美幸・伊東直登. (2014). 乳幼児期から青年期に至る「読み聞かせ-読書」活動の実態と促進要因の検討. *生涯発達心理学研究・生涯発達研究教育センター紀要*, 6, 105-142.
- 2) 浅木尚実. (2015). 幼児教育・保育の環境における質的向上への取り組み～ロングセラー絵本に関する読書経験調査と園文庫設置の提言～. *淑徳大学短期大学研究紀要*, 54, 49-62.
- 3) 古川元規. (2021). 大学生の絵本に関する調査研究の一考察－就学前から中学生までの絵本体験－. *別府大学短期大学部幼児・児童教育研究センター*, 40, 19-26.
- 4) 文部科学省. (2006). 平成18年度版文部科学白書第2部第2章第1節「確かな学力」と「豊かな心」を育成し、「生きる力」をはぐくむ学校教育を目指して. <https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/index.htm> (2021年8月28日10時30分)
- 5) 北海道教育委員会. (2012). 子どもの読書活動推進プログラム. <<https://www.library.pref.hokkaido.jp/web/relation/qj1ds0000000ey5-att/qj1ds0000000fav.pdf>> (2021年8月21日10時30分)
- 6) 渡邊 舞・井口美和・横田由紀子. (2021). 保育者養成校における絵本の選書に関する研究－保育所実習と幼稚園実習の比較－. *豊岡短期大学論集*, 17, 185-194.
- 7) 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領解説*. フレーベル館.
- 8) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*. フレーベル館.
- 9) 北海道えほん研究会. (2019). *幼稚園・保育園で使いたい読み聞かせ絵本*.
- 10) 横田由紀子・渡邊 舞・井口美和. (2021). 学生の絵本の選書意識に関する研究－「絵本に関する授業」前後の意識調査による考察－. *札幌大谷大学・札幌大谷短期大学部紀要*, 51, 29-42.

